日本仏教史８ - 平安仏教２　日本天台宗 -

１、最澄

最澄像、一乗寺蔵

最澄（766-822）は近江国滋賀郡（滋賀県大津市坂本の一帯）を勢力範囲としていた帰化人三津氏[1]の出身である。宝亀 11 年（780）に 14 歳で得度し沙弥となり、延暦 4 年（785）に 19 歳で東大寺の戒壇院で具足戒を受けて比丘となった。最澄はその年から１２年間、一族ゆかりの日枝神社のある日枝山（比叡山）に自刻の薬師如来を本尊とする一乗止観院（後の根本中堂）を建て山岳修行を行っている。この時の「願文」がこれである。

悠々たる三界は純ら苦にして安きこと無く、擾々たる四生は唯だ患にして楽しからず。牟尼の日久しく隠れて慈尊の月未だ照さず。三災の危きに近づき、五濁の深きに没む。加以ず、風命保ち難く露体消え易し。草堂楽しみ無しと雖も然も老少白骨を散じ曝し、土室闇く狭しと雖も而も貴賤魂魄を争い宿す。彼を瞻、己を省みるに此の理必定せり。

仙丸未だ服さざれば遊魂留め難く、命通未だ得ざれば死辰何とか定めん。生ける時善を作さずんば死する日獄の薪と成らん。得難くして移り易きは其れ人身なり。発し難くして忘れ易きは斯れ善心なり。是を以て法皇牟尼は、大海の針・妙高の線を仮りて人身の得難きを喩況し、古賢禹王[2]は、一寸の陰・半寸の暇を惜しみて一生の空しく過ぐるを歎勧せり。因無くして果を得る、是処有ること無く、善無くして苦を免るる、是処有ること無し。

伏して己が行迹を尋ね思うに、無戒にして窃かに四事の労を受け、愚痴にして亦四生の怨と成る。是の故に、『未曽有因縁経』に云く、「施す者は天に生まれ、受くる者は獄に入る」と。提韋女人の四事の供は末利夫人の福と表れ、貪著利養の五衆の果は、石女担輿の罪と顕る。明らかなる哉、善悪の因果、誰か有慙の人にして、此の典を信ぜざらん。然れば則ち、苦因を知りて而も苦果を畏れざるを釈尊は闡提と遮したまい、人身を得て徒に善業を作さざるを聖教に空手と嘖めたまう。

是に於いて、愚が中の極愚、狂が中の極狂、塵禿[3]の有情、底下の最澄、上は諸仏に違い、中は皇法に背き、下は孝礼を闕く。

---

[1] 、漢の孝献帝の末裔を自称していた。
[2] 、中国古代の伝説的な帝で夏朝の創始者。黄河の治水に打ち込みすぎて半身不随になった。
[3] 、禿人とは、頭髪を剃って外見だけ出家者のすがたをしているが戒を破り教えを守らない者、もしくは生活のためだけに僧となった者を罵る語。

謹みて迷狂の心に随い三二の願を発こす。無所得を以て方便と為し、無上第一義の為に金剛不壊不退の心願を発こす。

我れ未だ六根相似の位を得ざるより以還出仮せじ。其の一。

未だ理を照らすの心を得ざるより以還才芸あらじ。其の二。

未だ浄戒を具足することを得ざるより以還檀主の法会に預からじ。其の三。

未だ般若の心を得ざるより以還世間の人事の縁務に著かじ。相似の位を除く。其の四。

三際の中間に修する所の功徳は独り己が身に受けず、普く有識に回施して悉く皆無上菩提を得せしめん。其の五。

伏して願くば、解脱の味独り飲まず、安楽の果独り証せず。法界の衆生と同じく妙覚に登り法界の衆生と同じく妙味も服せん。

若し此の願力に依りて六根相似の位に至り、若し五神通を得ん時は必ず自度を取らず、正位を証せず、一切に著せざらん。願くば、必ず今生無作無縁の四弘誓願に引導せられて、周く法界を旋り、遍く六道に入り、仏国土を浄め、衆生を成就し、未来際を尽くすまで恒に仏事を作さん。

ここで自らを「極愚」「極狂」と述べているが、この意味を最澄は『天台小止観』に「ひとえに禅定福徳を修して智慧を学せざるは、これを名づけて愚といい、ひとえに知慧を学して禅定福徳を修せざるは、これを名づけて狂という」と記している。

最澄は、日枝山での修行を終えた延暦 16 年（797）に内供奉十禅師に任ぜられている。天台宗とは隋代の智顗（538-597）によって大成された宗で、龍樹系中観思想を『法華経』からの視座で捕らえた極めて実践的なものである。最澄は一切衆生の救済を説く天台宗に仏教の本質を見たのである。日枝山での 12 年の間、最澄は貴族や南都諸宗の僧に奈良仏教の問題点を指摘し続けていたと考えられる。内供奉十禅師に任じられたのはその成果であろう。翌延暦 17 年（798）からは毎年一乗止観院で「法華十講」を開いている。これは『妙法蓮華経』8 巻に『無量義経』と『観普賢菩薩行法経』を合せた 10 巻を、10 人がひとり一巻ずつ受け持って連講するというものである。延暦 20 年（801）には、南都の高僧 10 人を招聘してこの講を行っている。延暦 21 年（802）には和気清麻呂が宇佐八幡の神託によって創建した高尾山寺（現在の神護寺）で、南都諸宗の高僧と最澄により天台智顗の教えを尋ねる法会が開かれ、これに桓武天皇と安殿親王が賛辞を送っている。これは最澄が天台宗の重要性を認識させた成果である。この成果を受けて、最澄は伝えられている天台宗の経論に誤字や行脱が多く、また直接教えを受けなければ解らないこともあるとして、留学生と還学生[4]を一人ずつ唐に送ることを天皇に求めたのである。これにより、円基と妙澄の二人が留学生に、最澄が還学生に、義真が訳語僧に任命された。

最澄が肥前から唐に向かったのは延暦 23 年（804）7 月 6 日であった。9 月に明州に着くと、10 月には天台山[5]に到着している。智顗の後、唐代に玄奘が新訳の経典を持ち込んだことで、天台宗は古い仏教と見なされ衰退していたが、この時期、湛然（711-782）の活躍で江南地方を中心に復

---

[4] 、教学の短期移植を目的とした短い期間の留学。

[5] 、桐柏峰・仏隴峰・赤城峰・瀑布峰などの峰々が存在する中国三大霊山の一つ。智顗はこの天台山に登って天台教学を確立した。仏隴峰の南山麓に智顗の国清寺がある。

興し始めていた。天台山で多くの経論を受け取ると、11 月には山を降り天台宗第七祖ともいわれている龍興寺の道邃のもとで天台教学を学んだ。翌年 3 月に道邃から大乗菩薩戒を受けると、同月には帰国のため明州に戻っている。ここで風待ちをしている間に、越州に赴き竜興寺で密教を学び 230 部 460 巻の教論と共に 6 月には 8 か月半の旅を終えて帰国している。帰国した最澄を待っていたのは病に侵された桓武天皇であった。病気の天皇にとって必要なのは天台ではなく密教であった。直ちに「最澄闍梨」に対して「諸寺の智行兼備の者」に「灌頂[6]三昧」を受けさせるよう勅が発せられ、9 月には高尾山寺で灌頂が行われている。しかし、最澄は密教が専門ではなかったため、大同元年（806）に空海が密教を学んで帰国すると密教関連の経論を借り受けにいくことになる。

弘仁 3 年（812）に最澄は自分の亡き後の比叡山寺（この頃は薬師堂・文殊堂・経蔵の 3 堂が建てられていた）の事務を統括する総別当を泰範に、住職にあたる伝法師を円澄に託すという遺言状を書いている。ところがこの 1 か月半後に、泰範はこれを断り空海に弟子入りしてしまう。この時すでに最澄は朝廷の後ろ盾を失っており、代わって空海が絶大な影響力を持つようになっていたのである。更に弘仁 4 年（813）に最澄が『理趣経』[7]の注釈書である『理趣釈経』[8]を借りたいと空海に申し入れたところ「秘蔵の奥旨は文を得るに貴しとせず、ただ心をもって心に伝うるにあり。文はこれ糟粕、文はこれ瓦礫なり」として拒否したため、二人の関係は途絶えてしまう。この影響で最澄の弟子たちも空海から密教の教義を学ぶことが出来なくなった。このことで最澄と一部の弟子たちとの関係が悪化したのか、この年、最澄は通訳僧として唐に同行し信頼を寄せていた義真に、後継者とする付法印書を授けている。弘仁 9 年（818）には具足戒を破棄し『山家学生式』[9]を定め、天台宗の年分度者は比叡山において大乗戒を受けて菩薩僧となること、12 年間山中で修行することなどを義務づけた。大乗戒の授戒によって正規の僧になるという大乗大僧戒や、このための専用の戒壇というのは最澄が独自で考え出したもので、南都諸宗には受け入れ難いものであった。

南都諸宗や真言宗との対立により、最澄は最期まで僧綱に任じられることなく弘仁 13 年（822）に没した。最澄の後、比叡山寺を継承したのは円澄ではなく義真であった。弘仁 14 年（823）には比叡山寺に延暦寺の寺号を送られ、初の大乗菩薩戒授戒会が行われている。しかし、比叡山の凋落は激しく、天長 8 年（831）には円澄と 25 人の兄弟弟子の連名で、空海に密教の教えを乞う懇願書が出されている。天長 10 年（833）に義真は弟子の円修を後継者に指名して没したが、円澄を推す者たちがこれを認めなかったため、8 か月に渡り延暦寺は伝法師がいない状態となった。結果、円修は室生寺へ移され、承和元年（834）に円澄が伝法師を継承することになるが、これ以降、円澄と義真の二つの派閥が生まれることになる。

---

6 、元来はインドで王が即位する時行う頭に海の水を注ぐ儀式のことであったが、密教では弟子の頭頂に智水を注いで仏の位を継承させる儀式を意味するようになる。。

7 、読誦の功徳を強調していることから真言宗では毎日の勤行で唱えている経典。

8 、「性欲の肯定」・「性欲および性交こそが菩薩の位」が説かれている不空の注釈書。

9 、ここに書かれている「照千一隅、此則國宝」の「千」が長らく「于」と誤読されて「一隅を照らす。此れ則ち国宝なり」とされてきたが、近年「照千一隅」は『摩訶止観』の注釈書である『摩訶止観輔行伝弘決』で本当の国宝とは何であるのかを論じているところを引用したもので「照千里一隅守」という意味であることが明らかになった。

２、円仁

円仁像

円仁（794-864）は下野国の生まれで、9 歳から大慈寺で修行を始めたとされる。大慈寺の広智は鑑真の直弟子である道忠の弟子であるが、道忠が最澄の理解者であったことから、15 歳の時に広智に連れられ比叡山寺に上り最澄に師事することになる。最澄が『摩訶止観』[10]を学ばせた弟子 10 人のうち、代講を任せられたのは円仁ひとりであった。最澄の東国巡遊では案内役として同行している。最澄が死去した後、承和(じょうわ)2 年（836 年）と翌承和 3 年（837 年）に唐への渡航を試みたが失敗した。承和 5 年（838 年）に最後の遣唐使となる 3 回目の渡航で、船は全壊したもののようやく唐に上陸することができた。しかし、還学生であったことから天台山への入山許可が下りず、そのまま帰国せねばならない事態に陥る。そこで円仁は遣唐使一行から離れて不法滞在者として唐に留まり、新羅僧の助けで天台山の代わりに五台山に向かう。約 1270 ㎞を歩き、840 年にようやく五台山を巡礼している。ここで法華経と密教の整合性に関する未解決の問題など「未決三十条」の解答を得たほか、日本にまだ伝来していなかった五台山所蔵の仏典 37 巻の書写もしている。さらに法照[11]の流れを汲む行儀をも学んだ。ここから、さらに長安まで約 1100 ㎞を徒歩旅行している。その際、大興善寺の元政から灌頂を受け、金剛界大法を授かり、青竜寺の義真からも灌頂を受け、胎蔵界・盧遮那経大法と蘇悉地(そしつじ)大法を授かっている。また、延暦寺が所蔵していなかった金剛界曼荼羅を長安の絵師・王恵に代価 6 千文で描かせている。これらを持って帰国しようとしたが、今度は帰国願が拒否されてしまう。帰国できない状態の中、円仁はサンスクリット語を学び、多数の仏典を書写している。会昌 2 年（842）に「会昌の廃仏」[12]が始まると、会昌 5 年（845）には外国人僧放還令が出され、承和 14 年（847）に 559 巻の経典と 21 種の図像法具と共にようやく帰国している[13]。結果的に、円仁は天台ではなく密教と念仏を学ぶことになったが、このことがかえって歓迎され、嘉祥(かしょう)元年（848）には内供奉十禅師に任じられている。天台宗の教えに密教を融合させ、すべての仏教の教えは一つだとする円仁の「一大円教論」は、長安で学んだ仏教を応用した円仁独自の見解である。また中国天台の四種三昧という 4 種の常行三昧に五台山の念仏を組み入れたものを考案し、これが弟子の相応によって「山の念仏」[14]として

---

10 、智顗の講義を弟子がまとめたもので、仏教の瞑想である止観について解説したもの。

11 、五台山や長安などで、5 種の音声からなる五会念仏という音曲的な念仏を宣布した唐代の浄土教の僧。20 世紀に敦煌で発見された写本のなかにも『法照和尚念仏讃』が発見されている。

12 、武宗は道教に傾斜し、仏教と共に長安を中心に盛んであった「唐代三夷教」（マニ教・ゾロアスター教・ネストリウス派キリスト教）も排斥した。寺院 4,600 ヶ所余りが廃止され、60,500 人の僧が還俗させられた。

13 、この 9 年 6 ヶ月に及ぶ求法の旅の間、書き綴った日記が『入唐求法巡礼行記』で、これは日本人による最初の本格的旅行記であり、時の皇帝、武宗による仏教弾圧である会昌の廃仏の様子を生々しく伝えるものとして歴史資料としても高く評価されている。

14 、比叡山延暦寺の常行三昧堂で、陰暦 8 月 11 日から 7 日間行なう不断念仏法。

日本浄土教の基礎となった。引声[15]や梵唄[16]の基礎をつくったのも円仁である。

斉衡元年（854）に円澄の後継者として伝法師となると、座主という称号を始めて用いた。僧尼だけではなく、淳和太后に菩薩戒を授けた他、多くの皇室や公家にも灌頂を行うことで、延暦寺の社会的地位を向上させた。僧網や僧正に任命されないまま弟子の安慧（794-868）に座主を譲ったが、死後に僧正と同位の「法印大和尚位」という新しい僧位を追贈されている。

円仁が開山もしくは再興したと伝わる寺は関東に瀧泉寺（目黒不動）や浅草の浅草寺など 209 寺、東北に山形の立石寺や松島の瑞巌寺、平泉中尊寺など 331 寺余ある。

3、円珍

円珍像、金倉寺蔵

円珍（814 -891）は讃岐国の生まれで空海の甥（もしくは姪の息子）とされている。15 歳で比叡山寺に上り義真に師事し、12 年間の籠山行を行っている。承和 12 年（845）に役行者を慕って大峯山・葛城山・熊野三山を巡礼するなど修験道の発展にも寄与した。承和 13 年（846）には延暦寺の学頭となる。仁寿3 年（853）に新羅商人の船で入唐を試みるが、途中で暴風に遭って台湾に漂着した。福州に着くと開元寺でサンスクリット文字や印相[17]、真言[18]、四分律疏などを授かり、温州で道教の書、台州で維摩経や因明[19]の注釈書を得た後、天台山を巡礼している。さらに洛陽から長安の青龍寺に向かい密教を学んだ。天安 2 年（858）唐商人の船で帰国している。「円密一致」を宗旨とし、真言密教の立場から『法華経』を解釈した。帰朝の翌年、天智天皇の時代に大友皇子が創建したと伝えられる三井の園城寺（三井寺）を修築すると、持ち帰った経論を収めて天台別院とした。貞観 10 年（868）安慧の死去に伴い延暦寺第 5 代座主となると、円仁を「師兄」と敬称し円仁（円澄）門流との融和を図った。宮中でも講師や祈祷を幾度となく行なうなど、皇室や公家とも良好な関係を築いた。元慶 3 年（879）に桓武天皇の孫である遍照が天台僧として初の僧網に就任すると[20]、元慶 7 年（883）に円珍も延暦寺座主として初めての僧網に任ぜられている。円珍以降、6 世から 13 世までは円珍（義真）門流が園城寺長吏と座主を兼帯することが多かったが、14 世からは円仁門流が座主を占めるようになり、円珍門流の不満が溜まっていった。

---

15 、声を長く引伸してさまざまな装飾をつけて歌ううたい方。
16 、仏徳を賛嘆するために、曲調にのせて経文などを唱詠するもの。
17 、手の指で様々な形を作り、仏・菩薩・諸尊の内証を標示するもの。印、印契、密印、契印ともいう。密教の発達に伴って相が定まり、それぞれの意味が説かれるようになった。
18 、サンスクリット語のマントラの訳語で、「真実の言葉、秘密の言葉」という意味。浄土真宗を除く多くの大乗仏教の宗派で用いられる。「密言」、「呪」、「明呪」とも訳される。
19 、五明（声明（音韻学・文法学）・工巧明（工芸・技術論）・医方明（医学）・因明（論理学）・内明（仏教学））の一つ。
20 、仁和元年（885）には僧正に昇任している。

４、安然

円仁と円珍によって作られた台密（天台密教）を大成させたのが安然（841－902 頃）である。本来全く異なる天台と密教を調和させることは容易なことではなかった。最澄は「法華一乗と真言一乗、何ぞ優劣あらん」と同等に見ていたが、円仁は理においては同等であるが事（修法）では密教が勝るとして「理同事勝」とし、円珍は理も事も密教が勝るとして「理事倶勝」と説いている。これに対して安然は中国天台の「四教教判[21]」を改め、天台教学の上に真言密教を位置づける「五教教判」を打ち立て「真言宗」を称するに至った。この思想が天台本覚思想となる。この思想は空海の東密にも大きな影響を与え、特に覚鑁の真義真言に強くその傾向が認められる。また後の鎌倉新仏教にも間接的な影響を洗えることになる。

５、良源

良源（912 -985）は、近江国浅井郡虎姫（滋賀県長浜市）の豪族である木津（こづ）氏の出身で、12 歳（15 歳ともいう）で比叡山に上った。良源は、円仁門流の傍流であり、身分も高くはなかったが、論客として頭角を現すと、村上天皇の中宮で右大臣藤原師輔（もろすけ）(909-960) の長女である藤原安子 (927-964)[22]の安産祈願を行い摂関家と関係を結ぶことに成功し、康保 3 年（966）には天台座主になっている。延暦寺は承平 5 年（935）の大規模火災で根本中堂を初めとする多くの堂塔をすでに失っていたが、さらに良源が天台座主に就任した年にも火災にあっている。良源は藤原師輔の後援を得て最澄の創建当初は小規模な堂だった根本中堂を壮大な堂とするなど諸堂を再建した他、円仁が開いた横川[23]も復興させるなど、現在の延暦寺伽藍の基礎を造った。天禄元年（970）には「二十六ヶ条起請」[24]を公布し、社会問題化していた僧兵や世俗化していた寺内僧侶の規律を正している。教理でも密教化していた天台教学の立て直しを図っており、これら数々の功績から延暦寺中興の祖とされている。

良源木像、法界寺蔵

良源が弟子たちを優遇し脱密教化を図ったことにより、密教を重視していた円珍門流との対立

---

21 、智顗による天台教学の分類。蔵教（経・論・律の三蔵教。小乗教ともいう）、通教（大乗の初門）、別教（菩薩のみに別に説かれた教え）、円教（最も優れた完全なる教え）の４つ。

22、冷泉天皇（950-1011）と円融天皇（959-991）の母。

23 、朝廷から贈られた正式の諡号は「慈恵」であるが、命日が正月の 3 日であることから「元三大師（がんざんだいし）」の通称で親しまれている。良源が法華経の講義を行った比叡山横川の定心房は、後に四季講堂となり、良源像を祀ることから「元三大師堂」と呼ばれている。

24 、僧の奢侈、武装、私刑を禁じ、籠山結界をきびしく守らせ、春秋 2 季に房主帳を提出させることで生活を律するなど、日常の修行にいたるまで細かく定めている。

が深まることになる。良源の後座主に就いた藤原師輔の子である尋禅（943-990）が座主を辞し、円珍門流の余慶が座主となると両派の対立は過激化し、正暦 4 年（993）年に円珍門流の成算が円仁門流の赤山禅院を襲撃すると、報復として円仁門流が比叡山の円珍門流の坊舎を破壊することになる。この襲撃により比叡山にいた円珍門流千余人は園城寺に避難すると延暦寺から独立し寺門派となり、延暦寺を本山とする円仁門流の山門派から分裂した。

また良源は、中世以降今日に至るまで「厄除け大師」[25]として独特の信仰対象となっている。全国の社寺に見られる「おみくじ」の創始者も良源とされている。

良源は多くの優れた弟子を育てたことでも知られ、座主を継承した尋禅以外にも、蔵賀（ぞうが）（増賀または僧賀、917-1003）、源信（942-1017）、覚運[26]（953－1007）、覚超[27]（960－1034）などが知られている。

「角大師」　「豆大師」　「鬼大師」　「良源御影」

６、蔵賀

良源の弟子の中でも、特に異才の僧侶として多くの伝説と共に伝えられている。応和 3 年（963）に如覚（藤原高光）[28]の勧めで多武峰（とうのみね）（奈良県桜井市）に草庵一乗房を結び、ここで『摩訶止観』や『法華経』の講義を行い多くの弟子を育てている。名誉や利権を嫌ったことで知られているが、多武峰に籠居した理由としては、次のような逸話が伝えられている。

正月に天皇の御前で行われる「内論議（うちろんぎ）」という高僧達が論議する催しの際、供養のために貴人達が食べ物の残りを庭に投げ捨て、乞食達がこれを争い合って食べるのを眺める習慣があった。高僧の一人として参加していた蔵賀は、僧侶の列から走り出ると乞食と共にそれを食らったとい

---

25 、良源を象った護符には「角（つの）大師」「豆大師」「厄除け大師」など、様々な様式がある。角大師には、2 本の角を持ち骨と皮とに痩せさらばえた夜叉の像を表したものと、眉毛が角のように伸びたものの 2 つのタイプがあるが『元三大師縁起』などの伝説によると、良源が夜叉の姿に化して疫病神を追い払った時の像であるという。豆大師は紙に 33 体の豆粒のような大師像を表した絵である。良源は観音の化身とも言われており、観音はあらゆる衆生を救うために 33 の姿に化身するという「法華経」の説に基づいて 33 体の大師像を表したものである。『元三大師御鬮諸鈔』では「魔滅大師」とされている。

26 、良源に天台教学を学び、さらに良源の勧告により静真・皇慶から真言密教を学んだ。宮廷貴族に取り入り、藤原道長に摩訶止観等を講じ、一条天皇には法華疏を進講した。後に源信を祖とする恵心流とともに檀那流の祖とされた。

27、良源に師事した後、慶円から灌頂をうける。源信にも師事し、浄土往生を願う比叡山横川の同朋組織二十五三昧会の根本結衆 25 人のひとりに数えられている。卒塔婆を立てることにより、土地の有縁・無縁の大衆や過去・現在の父母,生者死者などの平等利益を願う習慣を広げた。

28 、藤原師輔の八男で三十六歌仙の一人。右少将であったが師輔の死を契機に良源の下で出家した。しかし、良源と尋禅との固い結び付きに入り込めずそれを苦にし、出家の翌年には横川を去り多武峰に移り住んだ。『多武峯少将物語』を始めとして、多くの物語に逸話が記されている。

う。これを見た貴人や僧侶たちが「この禅師は物に狂ったのか」と大声で騒ぐのを聞いて、蔵賀は「わしは物に狂っておらぬ。そう言われるお手前方こそ、物に狂っておられるのではないか」と言ったきり家の中に立てこもってしまい、その後、多武峰に籠居し人との交わりを極力避けて『法華経』読誦と念仏の日々をおくったという。

権力を求める僧侶が目に付く中で、蔵賀が聖僧として広く支持を受けていたことは『今昔物語集』や『発心集』など様々な物語から知ることが出来る。多くの逸話の中でも、特に奇人ぶりを伝えるものとしては『撰集抄』にある、名利を捨てるために全裸で物乞いをしながら伊勢神宮か比叡山まで4日間旅をしたという話の他に、次の『宇治拾遺物語』にある話が知られている。

三条大后（藤原詮子[29]）は出家して尼になろうと思い立ち、蔵賀に授戒を依頼した。弟子たちは権力を毛嫌いしていた蔵賀は断ると思っていたが、快く引き受けたので驚いたという。蔵賀が宮に来てくれることを大后は喜び、多くの貴人や僧侶もその場に集まってきた。蔵賀上人は出家の作法通り大后の長く美しい髪を切り儀式を終えると大声で次のように言い放った。「この蔵賀をあえてお呼びになったのはいかなる訳でござろうの。ちと合点がいきませんぞ。ひょっとして私の逸物が大きいとお聞きになりましたか。確かに他の者に比べれば大きゅうござるが、若いうちはともかく、今では練り絹のようにくたくたでござるぞ」。これを聞いた女房や公卿・殿上人・僧たちは、あまりの言葉に目や口が開いたきりふさがらなかった。この時の様子を『今昔物語集』には「歯ヨリ汗出テ」我にもあらぬ心地であったと書いている。さらに蔵賀は退出の際に、わざと恐縮の体で袖をかき合わせると「いやいや年を取りました。ひどい風邪をひき、腹までこわしておりましてな、本来は参上できるような体でもないのじゃが、ぜひにということで参上つかまつった。もう腹が限界じゃ、そうそうに退出させていただこう」と言ったかと思うと、縁側にしゃがみ込んで尻をからげ、薬缶から水をぶちまけるように下痢便をひり散らした。その音は大后の御前まで響き渡った。若い貴族たちは大声で笑い罵り、僧たちは「何という気違いをお召しになったことか。」と文句を言ったという。

蔵賀は師である良源が権威を求めることを面白く思っていなかったようで、良源が天皇に謁見する際、先駆に加わって乾鮭を太刀のように腰に下げ、やせこけた雌牛に乗って牛の向きを再三変えて乗り回して先導したという話もある。

鴨長明は蔵賀の奇行の本意を「この人の振る舞いは、後世の人達は物狂いというかも知れないが、汚れた世の中から離れんがための思惑があっただけ」であるとしている。

蔵賀上人行業記絵巻、談山神社（多武峯妙楽寺）

29 、円融天皇の女御で一条天皇の母。摂政関白・太政大臣藤原兼家の次女で、道隆・道兼・道長、冷泉天皇女御超子は同母の兄弟。

7、源信

源信像、聖衆来迎寺所蔵

源信は親鸞聖人が念仏の教えを大成させた七高僧の一人に数えていることでも知られている。7歳の時に父と死別すると、信仰心の篤い母の影響により9歳で良源の下に入門した。天暦10年（956）にわずか15歳で『称讃浄土経』を講ずると、村上天皇により法華八講[30]の講師の一人に選ばれた。源信はこの時下賜された布帛[31]などをすべて故郷で暮らす母に贈った。すると母は、蔵賀を見習って名利など求めず、ひたすら人々を救うために仏教を学んでほしいと源信を諌めて品物を送り返したという。この言葉に気づかされた源信は、これ以降、横川にある恵心院に隠棲して念仏三昧の道を歩むことになる。永観2年（984）に師である良源が病におかされると、これを機に『往生要集』の撰述に入り、永観3年（985）に良源が死去した直後にこれを書き上げている。この翌年、毎月25日に『法華経』を講じた後、夜に不断念仏と光明真言[32]を修し、来世の浄土往生を願う「二十五三昧会」を結成した。この会の結束は強く、結衆の中に病人が出れば交代で看病し、臨終には一同こぞって念仏を助け、死去すれば共同の墓地に葬り、念仏と光明真言により冥福を祈った。これは出家在家を問わない念仏実践結社であり『往生要集』はこの指南書であった。師の良源も『極楽浄土九品往生義』を書いているが、これは教義書であって実践書ではない。念仏の実践書である『往生要集』は中国仏教にも影響を与えている。国内でも名声は広がり藤原道長により権少僧都[33]に任命されたが、名利を嫌って僅か1年で辞退し横川の華台院に隠棲してしまう。『往生要集』の念仏は心の中に極楽浄土を思い描くという観想念仏であるが、華台院で書いた『阿弥陀経略記』は称名念仏の色合いを濃くしており、これが鎌倉仏教の浄土思想に大きな影響を与えることになる。

なお、紫式部の『源氏物語』、芥川龍之介の『地獄変』に登場する横川の僧都は、源信をモデルにしているとされる。

---

30 、『法華経』8巻を第1巻から1巻ずつ8回に分けて講義し賛嘆する法会。起源は中国とされるが，日本では延暦 15 年(796)に奈良の石淵寺の勤操が4日間『法華経』を講義したのを最初とする。その後宮中，幕府において死者の追善供養のために行われた。

31 、布と帛。木綿ものと絹ものの織物。

32 、正式名称は不空大灌頂光真言。密教経典である『不空羂索神変真言経』や『不空羂索毘盧遮那仏大灌頂光真言』に説かれている。「唵　阿謨伽　尾盧左曩　摩訶母捺囉　麼抳　鉢納麼入嚩攞　鉢囉韈哆野　吽（オン　不空なる御方よ　毘盧遮那仏（大日如来）よ。偉大なる印を有する御方よ　宝珠よ　蓮華よ。光明を　放ち給え　ウン）

33 、僧官位は僧正・僧都・律師に分かれており、僧都は更に大，少，権大，権少の4種の階級に分かれている。権少僧都は僧都の最下位。

【『願文』現代語訳解釈文】

はるか限りないこの世界は、ただ苦しみばかりで安らかなことは無く、乱れ騒がしい生き物たちは、ただ思い悩むことばかりで安らぐことはない。お釈迦様が遠い昔にお亡くなりになられてより以来、次のほとけさまは未だお姿を現されていない。災いによるこの世の終わりが近づきつつあり、人々の考えが誤って汚れに満ちた世の中に沈んでしまっている。その上、風に吹き消される灯火のようにはかない命は保ちがたく、朝露のようなこの体は消えやすい。草葺きの葬送を執り行うお堂には楽しみは無いのに、老いも若きもここに白骨を散じさらし、墓の中は暗くて狭いにもかかわらず、どのような身分や職業の人であれ相争ってここに魂を宿らせるようなものである。お釈迦様を仰ぎ見て、自分を省みるに、この理は確かである。

わたしは不老長寿の薬をまだ飲んでいないので、魂をこの世に留めておくのは難しい。また前世の行いの善悪を知る神通力をまだ得てはいないので、自分の死期をいつであると定めたらよいのであろうか。生きている間に善い行いをしなければ、死を迎えた日には地獄の薪となって火に責められるであろう。得ることが難しく、また得てしまえばほかのものに生まれ変わってしまい易いのが人の身である。起こし難く、起こしても忘れ易いのが善の心である。そこでお釈迦様はこのことを、大海原の中の一本の針を探すことや、世界で一番高い山の頂上から垂らした糸を麓の針の穴に通すことに喩え、中国古代の賢い王である禹（う）は、少しの時間、わずかな暇をも惜しみ、一生が空しく過ぎ去ってゆくことを嘆いた。原因が無くて結果があるという道理はなく、善い行いをすることなく苦しみを免れるという道理もない。

ほとけに伏して自分のこれまでの行いを尋ね考えてみるに、戒律にかなう正しい行いもなくひそかに衣服や食事などの生活の世話を受けながら、真理を知らず愚かにしてまたあらゆる生き物に迷惑をかけている。このためお経には「他に施す者は天に生まれ変わり、逆に施しを受けてばかりいる者は地獄に入る」と説かれている。ある女性が前世において献身的に施しの精神を実行したところ、生まれ変わって国王の后となる幸福に恵まれ、その施しを貪り受けた５人の出家者は、生まれ変わって皇后の乗る御輿をかつぐ奴隷となる不幸な結果に顕れた。行いの善悪により、その結果の善悪もまた明らかである。恥を知る人であるならば、誰がこの教えを信じないであろうか。このようなことにより、苦しみの原因を知りながらその結果を恐れない者を、お釈迦様は悪の心に囚われてほとけと成るに及ばない者として退けており、人の身に生まれながら、いい加減に過ごして善い行いをしない者を、ほとけのおしえでは、宝の山に入りながら何も得ずに帰る者であると責めている。

ここにおいて、愚か者の極みであり、狂っている者の極みであり、徳のないつまらない僧侶であり、最低である最澄は、仏弟子としてはほとけのおしえに違反し、国民としては天皇の定めた法に背き、子供としては親孝行を欠いている。

謹んで迷い狂える心に随いながらも、ここに五つの誓いを起こした。全てのものにとらわれないことを手段とし、最高の真実のおしえのために、壊れたり退いたりすることのない、堅い決意の心からの願いを起こしたのである。

わたしは、世のあらゆる出来事を先入観や煩悩に惑わされずありのままに見聞きし考えること

ができる相似の位という修行の段階に至るまでは、比叡山を下りて世間に出るまい。

ほとけの教えを明らかに照らし出す心を得るまでは、修行に関係ない芸事はするまい。

戒律を完全に守り身につけることができるまでは、法要に出て施主からお布施をいただくことはするまい。

ほとけの智慧に満ちた心を身につけるまでは、世間の諸々の仕事をするまい。ただし、相似の位を得たならばこの限りでない。

わたしが現在の世で修めた善い行いの報いは、独り占めすることなく遍くすべての生き物に施して、ことごとく皆最高のほとけの智慧を得させたい。

ほとけに伏して願うところは、苦しみの世界から脱した喜びに一人浸ることなく、安らぎに至る方法を一人だけ知ることなく、この宇宙のあらゆる生き物が同じく苦しみの世界から脱し、安らぎに至る方法を知らしめたい。

もしこの心からの願いが叶って相似の位に至り、５種の不思議な力（見えないものを見る・聞こえない声を聞く・他人の心を知る・過去を知る・どこへでも自由に行く）を身につけたときは、必ず、自分だけがほとけの智慧を得ることなく、ほとけと同等の存在にはならず、あらゆる物事にとらわれることはなすまい。